

14世紀のヨーロッパで大流行したペスト（黒死病）は、人口の3人に1人を死に至らしめるとともに、当時の封建社会を大きく変質させた。

同時に忘れてはならないのが、文化芸術に与えた影響である。その象徴がボッカチオの書いた『デカメロン』である。これはフィレンツェの男女10人が、ペスト感染から逃れるため郊外の別荘に住み、そこで毎日全員が思い思いに語った話を集めたという形をとっているが、それは初めて散文で書かれたもので、やがて庶民が親しめる散文小説の範となった。またそれまで芸術作品といえ



ることほできないという前提があった。しかし当時ロンドンで猛威を振るったペストが身分や家柄、貧富の差にかかわらず無差別に広がるのを目の当たりにしたシェークスピアは、人の運命は予め決まっているもので

中で、何か新しい芸術の形態が生まれてくるのかも知れない。それは美術館についても言えることだ。

4月8日長野県立美術館の開館記念式典が開かれた。旧「しなの美術館」を数年かけて大規模改修を行った結果誕生したものだ。コロナ発生以前に構想されたものだが、ポストコロナの美術館のあり方を示唆するいくつかの注目すべき点がある。

そのひとつはランドスケープ・ミュージアムというコンセプトの下に、美術館を独立した建物としてではなく、周囲の善光寺や神社、地形全体と一体のものとして捉え、景観の一部たらん

ポストコロナの美術館とは

ば大伽藍や壁画のように、動かすことはできず、人びとがそこに集まって鑑賞するものが中心であった。しかしペストのために人々が集まれなくなったことから、次第に家に置き、また避難のときに持ち運びできる絵画などの芸術作品への需要が高まり、新たな表現形態が生まれる契機となった。

また演劇と言えばギリシャ悲劇が出発点で、その地位は長く揺るがなかったが、16世紀に至りシェークスピアが演劇史を大きく塗り替えた。ギリシャ悲劇では、人間とは神が創造したもので、その運命は予め決まっております、何をやってもそれを変え

はなく、各人は個性をもち、自由に人生をつくっていくものであるという発想で新しい演劇を作り上げた。身分や職業が同じ登場人物でも、その性格や行動は全く異なるものとして描かれた。

アーティストたちは、パンデミックという厳しい制約の中でも真善美の追求を止めず、あらゆる可能性に挑むことで、新しい時代に合った表現形態をつくり、発展させてきたのだ。

新型コロナウィルス禍は、文化芸術に大きな打撃を与えている。しかしその中でアーティストたちが何とか生き抜こうと努力し、社会がそれに応じる過程の

という姿勢がみられることである。また展示場と庭の境には、訪問者が自由に憩いの時を過ごせるスペースが備えられ、あたたかも屋根のある公園となっている。大切な収蔵品を展示するだけでなく、市民が日常生活の一部として自由に訪れ、お茶を飲み、食事をしながらくつろぐ場を提供したのである。こうしてこの地一帯は、ひとつの景観をつくりつつ、県民の生活を豊かにし、その文化度を高める重要な役割を果たすものとなった。ポストコロナの美術館のあり方のひとつを提示していると言ったことができよう。

（近藤文化・外交研究所代表）